

季節の科学トピックス

美しい花びらに、“ほう!”



©PIXTA

PROFILE

田中 修 たなか おさむ (甲南大学特別客員教授)

1947年京都府生まれ。

京都大学農学部卒業、同大学院博士課程修了。スミソニアン研究所(アメリカ)博士研究員、甲南大学理工学部教授を経て、現職。著書は、「植物学『超』入門」(ソフトバンク・アイ新書)、「植物はすごい」「植物はすごい 七不思議篇」「都会の花と木」「雑草のはなし」「ふしぎの植物学」(以上、中公新書)、「ありがたい植物」「植物のあっぱれな生き方」(幻冬舎新書)、「フルーツひとつばなし」(講談社現代新書)など。



桜の花の季節が終わると、それに代わって、春の明るさを感じさせてくれる植物は、ハナミズキです。街路樹として、また、公園や家の庭の花木として、白色あるいは淡紅色の花を美しく咲かせる人気の高い樹木です。この植物は、原産地が北アメリカで、アメリカ合衆国バージニア州の「州の花」に選ばれています。アメリカから日本に来て、日本のヤマボウシに似ているので、「アメリカヤマボウシ」ともいわれます。英語名は、「ドッグウッド」です。この木の樹皮を煎じた汁が、イヌの皮膚病の治療に用いられたり、イヌのノミ退治に使われたりしたようです。イヌを飼うのに役立つ木という意味で、「イヌの木」という名前がついているのです。

この花が春の陽光を受けて大きく開く様子は、見る人々の気持ちを明るくしてくれます。でも、この植物には、時代の流れに翻弄された哀しい歴史があります。1910年代のはじめに、東京の尾崎行雄市長がアメリカのポトマック河畔などに咲くサクラの木を贈りました。その返礼として、ハナミズキは日本に贈られてきた植物なのです。

ですから、この植物は「日米親善を記念する木」であり、花言葉は「返礼」です。しかし、その後、不幸にも日

本とアメリカの間に戦争が勃発したため、「親善の木」どころか「敵国の木」として虐げられたのです。現在のように、その美しさが讃えられ、公園や家の庭、街路で植栽され、観賞されるよう広まってきたのは、近年のことです。

この植物が咲かせている明るい淡紅色の花を見ると、思わず「きれいな色の花びらだ」という言葉が出ます。でもそのようなとき、「それは花びらではないよ」と言われることがあります。その際には、その通りですから、感心するように「ほう!」と答えてください。教えてくれた人は、びっくりするはずです。

ハナミズキの花では、きれいに色づいているのは花びらではなく、「ほう(苞)」なのです。苞とは、本来、花の下の方につく小さな葉です。ハナミズキの本当の花は小さなツブツブです。その周りを色がついた大きな苞(苞葉ともいう)が花びらのように取り囲んでいるのです。

このように、「ほう!」という返事が使える植物、すなわち、苞が花びらのように目立っている植物は、そんなに珍しくはありません。例えば、ドクダミやミズバショウの白い大きな花の花びらに見えるのは苞です。また、ブーゲンビリアの派手な色の花びらに見えるのも、やっぱり苞なのです。